

批判的応用言語学の視座から 英語教育を再検討する

山本 大 Yamamoto Masaru

ブリティッシュコロンビア大学・言語リテラシー教育研究科・博士課程

青山良輔 Aoyama Ryosuke

ブリティッシュコロンビア大学・言語リテラシー教育研究科・博士課程

日々刻々と変動する社会の中で、個人の言語観や価値観、学校組織の方針や実践、そして英語教育の諸相は密接につながり合っています。これらは社会を取り巻くさまざまな言説と相まって固定化し規範となり、わたしたちの日常生活に作用しています。これらの規範はあらゆる社会活動を営む上で必要である一方、時に人々の抑圧・差別・排除につながりうる概念でもあります。本連載では批判的応用言語学の観点から、日本の英語教育を取り巻く規範とその問題点を検討します。

批判的応用言語学とは

批判的応用言語学 (critical applied linguistics) とは、従来の応用言語学の関心領域である言語と社会の関わりに対し、批判的なアプローチを取る学問領域と実践の総称です。ここでいう「批判的」とは、わたしたちの社会——ひいては言語・個人・集団内/間——に存在する権力関係を応用言語学の中心的観点として導入し、既存の権力関係とそれによって生じる不平等な社会の仕組み、規範、言説を問題視し、公正なものへと変容させることを目指す立場を指します (Pennycook, 2021; 久保田, 2018)。つまり、批判的応用言語学における「批判的」とは、どのような人々が社会的多数派であるか、またどんなことが「当たり前」や「普通」として受容されているか——反対に、誰が社会的少数派であり、どんなことが「普通とは外れたもの」として扱われているのか——という問いかけだと言えます。批判的応用言語学は社会に流布する規範や言説がどのように言語を介して作用し、私たちのアイデンティティーや社会活動にどのように影響するのかを、社会正義

(social justice) の観点から精査し、変革のための指針を模索します。よって、情報処理・判断能力を指す批判的思考力 (critical thinking) の「批判的」とは意味合いが異なります。

英語教育を取り巻く規範や言説

わたしたちの日々の教育実践や英語教育の諸相は、広く社会や組織に流布する規範や言説、さらに、それらを内面化したわたしたち個人の信条などと密接かつ複雑に絡み合っています。

例えば、グローバル化が進行する現代では、英語非母語話者の数は母語話者よりも多く、国内外において母語が異なる人同士の共通語として英語が選択されることがよくあります。また一口に「英語」といっても、その使われ方は国や地域、コミュニティ、個人によって多様です。しかし、私たちは日常生活のさまざまな場面や媒体を通じて「正統な英語とは」ということばをめぐる言説に触れています。これにより生じる弊害にはどんなものがあるのでしょうか。

“正統な”英語を考える上で、人種に関する問題は避けては通れません。以下の図はあるイラストサイトにおける「英語 授業」の検索結果の一部です。英語のイメージが白人性 (Whiteness) と強固に結びついていることが窺えます。久保田



図 「英語 授業」のイラスト検索結果の一部



(2018) は、言語話者と人種の間には価値判断が付き纏い、【英語母語話者＝白人＝正統で優れている】という単純化された等式が社会的に形成されていると指摘します。こうした価値判断の問題点は何でしょうか。

性に関するテーマも「ことば」を扱う英語教育にとって大変重要です。性の多様性の認識が進んできた現代では、性を取り巻く考え方や言語使用も徐々に変化してきています。今日では、男女二元論的な規範を乗り越える表現として“they”が三人称単数代名詞の用法で使用されています。性自認を尊重する代名詞の使用も進んできました。しかし、日本社会においては伝統的な性規範が未だ根強く、英語教育における教材や教育実践の在り方にも深く根差しています (Moore, 2020)。

一見これらは「英語を教える」ことから少々距離のあるテーマだと感じられるかもしれませんが、なぜ、これらを英語教育実践の中で考え、取り組んでいく必要があるのでしょうか。端的に言えば、社会的不平等や不公正、規範意識や価値観は、わたしたちの日々の言語実践・社会実践の中で現出し、(再)生産されるからです。そして、これは同時に、わたしたちの英語教育実践が小さな変容につながる可能性を示唆しています。

批判的応用言語学の視点は、英語教育と個人の尊厳に関わる問題との関連を浮き彫りにし、英語教員の省察と、包摂的で公正な英語教育実践の視座と指針を提供します。たとえば、以下のような問いから日々の実践を省察することができます。

- 日本の英語教育を取り巻く規範や「当たり前」にはどのようなものがあるか。
- 学習者、そしてわたしたちは、どのような場面で、またどのような言語実践を通じ、そうした規範や「当たり前」に触れているか。
- わたしたちが日々接する・使用する言語表現にはどのような規範や価値観が潜んでいるか。
- それらの言語表現が社会的抑圧や周縁化、ステレオタイプ、差別を維持・助長している可能性はないか。
- より包摂的な英語教育を実践するために、わたしたちはどのような態度を持って、どのようにことばを使っていくべきか。また、それらをカリキュラム、指導、評価にどのように反映させるべきか。

本連載のながれ

本連載はリレー形式で、批判的応用言語学の視点から今日の英語教育について論じます。本稿に続く第2回では、日本の英語教育を標準英語イデオロギーやネイティブスピーカリズムの観点から批判的に論じます (日浅, 以下 () 内は執筆者)。第3回では、ジェンダー・セクシュアリティに焦点を当て、LGBT+の学習者にとって包摂的で肯定的な英語教育実践を模索し、そうした教育実践がすべての学習者に有益であることを示します (Moore)。第4回では、人種や「物」がどのようにわたしたちの言語実践と英語教育に関わっているかを、人種言語学・ポストヒューマニズム等の観点から論じます (坂本)。第5回では、批判的応用言語学の知見に基づいた現行学習指導要領下における英語教育の可能性、実践例を提示します (青山・田中)。最終回 (第6回) では、これまでの議論を総括し、クリティカルな英語教育への展望を議論します (久保田)。

本連載では形式の都合上、各テーマを個別に取り扱う体裁を取ります。しかし、これらは独立した要素ではなく、人々の国籍・人種・(言語)能力・年齢・社会経済的地位・障がいの有無などの要素と複雑に絡み合っています。たとえば、ネイティブスピーカリズムの枠組みでは、英語教育に携わる英語非母語話者はしばしば被抑圧側に立たされます。同時に、日本語母語話者である英語教師の多くは日本社会において多数派に属します。坂本 (2021) は多数派日本人が国内における少数者 (日本の先住民族、外国にルーツを持つ人々、性的・人種的少数の人々など) を抑圧する側にもなり得ると警鐘を鳴らします。したがって、本連載で扱う社会問題や議論は常に「交差性」(intersectionality) の観点から捉えることが求められます (コリンズ&ビルゲ, 2021)。

* * *

本連載の視点は、教員をはじめ、教材・テスト開発者、教育施策担当者、教師教育担当者など、英語教育にかかわる全ての人々にとって重要であると確信しています。本連載が、省察的な英語教育実践、そして包摂的な英語教育実現の足がかりとなれば幸いです。